

## 審査の結果の要旨

氏名 チョウ プエイ クエン

論文題目 A Study on the Spatial Elements and Users' Utilization of Toy Libraries in Japan

(日本におけるおもちゃ図書館の空間的要素及び利用状況に関する研究)

本論文は、日本におけるおもちゃ図書館の現在の問題点と取り組みを明らかにし、今後のおもちゃ図書館の計画あるいは現存のものの改善をめざした理想的な利用ができるための空間的要素を明らかにすることを目的とするものである。

おもちゃ図書館には、それが作られた起原の一つとして、特別なニーズをもつ子どもとその親へのサポートをする施設、特別なニーズに適合可能なおもちゃを使用した遊びができる子ども施設という意味がある。おもちゃ図書館はそのような重要な意義と役割を持ちながらあまり認知されていない現状が本論文の背景となっている。

そのため本論文では、アンケート調査により日本におけるおもちゃ図書館の実状と直面する問題点を明らかにし、行動観察により利用者の利用実態を把握して設計・計画時に配慮すべき利用者の行動に影響を与える空間的要素を明らかにし、またアンケート調査により親やスタッフの要求と期待についても明らかにした。

本論文は全6章で構成される。

第1章では、研究の背景、おもちゃ図書館の起原、定義と他の施設との違い、目的、文献レビュー、本研究の意義を述べている。

第2章では、研究の枠組み、方法、構成の概要を述べている。

第3章では、日本のおもちゃ図書館の概況と動向をとらえ、429のおもちゃ図書館に対するアンケート調査(回答:165館)により実状と取り組みを明らかにした。管理運営の問題は多く、ボランティアによる運営により開館日と時間が制約されることが最も問題であり、これに対しては他の施設との統合が解決策となりうることを示した。特別なニーズに適合可能なおもちゃに対する知識も広まっていないことも問題である。空間的には狭さ、おもちゃの収納、バリアフリーデザインの問題がある。おもちゃ図書館が一般に認知されていないため特別なニーズのある子どもの利用が少ないことも問題である。様々なプレイセッションは特別なニーズをもつ利用者の子どものおもちゃ図書館を利用するきっかけとなり利用者数を増やす可能性をもっている。また、おもちゃ図書館には健常児中心のもの(タイプⅠ)、特別なニーズのある子ども中心のもの(タイプⅡ)、両者が一緒に利用するもの(タイプⅢ)の3種類のタイプがあることを示した。

第4章では、タイプⅠ、Ⅱ、Ⅲそれぞれ3館(計9館)について行った非参与行動観察調査の結果から人間行動的に空間的要素とデザインの関係が考察された。遊びは、非占有、孤独、並行、協力の4種類に分類される。多様なプレイスペースやコーナー

は子どもの遊び行動のタイプに直接影響を与えることを示した。おもちゃ図書館のプレイセッションは特別なニーズをもつ子どもの利用を促進することも明らかにされた。

またこの章では、各館のバリアフリーデザインの実状も調査された。

第5章では、利用者の要求と期待が検討された。健常な子どもの親と特別なニーズをもつ子どもの親の意見から、すべての利用者にとって満足できる改善のためのデザインに対する要求と期待を見出した。駐車スペース、昼食のスペース、ベビーカーや授乳のためのスペースに対する利用者の要求が多く、開館日と開館時間を増やすこと、おもちゃのバラエティを増やすことが期待されていることを明らかにした。

第6章では、第3章から第5章までの結果をふまえ、結論として将来の研究の方向を見出した。

改善されるべき点として、管理運営面では、開館日の増加と開館時間の延長、多様なプレイセッション、他施設との統合によるサービスの向上、特別なニーズに適合可能なおもちゃ、安全が求められ、空間的には、バリアフリーデザイン、昼食のためのスペース、授乳、おむつ交換のスペース、駐車場、豊かなおもちゃ展示の空間が求められることがあげられた。

遊び行動を進めるため並行する遊び、協力的な遊び、子ども達の相互交流、子どもと大人の交流、大人どうしの交流、それぞれに望ましい空間の例があげられた。

以上のように本論文は、今まであまり注目されることのなかった日本のおもちゃ図書館の存在意義と実状、問題点、利用者の要求と期待を明らかにし、問題点、運営面も含めて建築空間の役割とあるべき姿を考察・提案することを試みた。

今後の子どものための施設の計画、特別なニーズをもつ子ども、障がいをもつ子どものための建築計画に重要な知見を与えるもので、建築計画学の発展に大いなる寄与となりうるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。